天羽やよい展

AMOU YAYOI EXHIBITION

名もなき南部女に捧げる刺しの花

Embroidery of a Prayer Dedicated to a Nameless Nanbu Woman

2024
9/14(土) 〉〉 29(日)

休場 火・水曜日
会場 はっち2階 シアター2
開場時間 10時〜17時
※金・土曜日は19時まで

入場無料

hacchi

祈りのふるまいとしての手しごと

「南部菱刺し」

"Nanbu Hishizashi"
Prayers in Embroidery

主催 八戸ポータルミュージアム はっち

天羽やよい展

名もなき南部女に捧げる刺しの花

南部菱刺しのさまざまな型こ（菱形の模様）を組み合わせ、まるで絵筆で抽象画を描くように、針と糸で独創的な菱刺しを施す天羽やよい。本展覧会では、天羽が2017年から刺し続けてきた未発表の新作帯を中心に菱刺しの魅力と天羽の創作活動について紹介します。南部菱刺しは、江戸時代後期、青森県東部を含む南部地方農村部で発祥したといわれています。綿布が貴重な時代、農民たちの着物は麻布でした。保温性と貴重な布を補強するために布目を埋めるように施された刺し子が菱刺しの始まりです。1996年には青森県伝統工芸品に指定されました。

天羽の菱刺しは、かつての青森の農村部で行われていたように、布を隙間なく刺し埋めていく「総刺し」を旨としています。それは、寒さ厳しい東北で生き抜くため、家族の衣にびっしりと菱刺しを施した南部の女性たちへの畏敬の念として、自らのものづくりに課した姿勢です。菱刺しに出会ってからおよそ半世紀、日々朝から日が暮れるまで、刺し続けるという天羽の手しごとは、菱刺しを遺した名もなき南部女に捧げる祈りのふるまいなのです。総刺しの密度と柔らかい草木染めの糸が魅せる、美しくも力強い天羽やよいの刺しの世界をどうぞお楽しみください。

－ 天羽やよい －

1948年東京生まれ、1975年より青森県八戸市在住
南部菱刺し制作者・青森県伝統工芸士。南部菱刺しを生活の中心において八戸での日々を過ごす天羽やよい。青森県民芸運動の中心人物であった青森県民藝協会会長の柏馬貞三氏（1908-1989）との邂逅や民俗学者・田中忠三郎氏（1933-2013）との交流を経て、南部菱刺しの生まれた歴史的背景と「名もなき南部女」を想い刺し続ける天羽がたどり着いた制作の境地は禅的な思想にも似ている。

Embroidery of a Prayer Dedicated to a Nameless Nanbu Woman

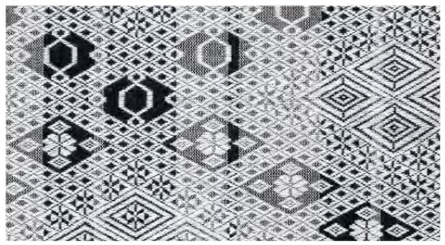
"Nanbu Hishizashi" is a traditional embroidery from eastern Aomori Prefecture. This embroidery was invented by women in rural areas as a way of making cloth more airtight, protecting from the cold, and reinforcing precious cloth. "Nanbu Hishizashi" was created approximately 200 years ago, and it is characterized by delicate diamond-shaped patterns left behind by women, and shows outstanding beauty among many Japanese handicrafts.

– Amou Yayoi [1948-] –

Amou Yayoi is a traditional artisan of Nanbu Hishizashi certified by Aomori Prefecture. In her work, the traditional diamond pattern of Nanbu Hishizashi is expressed in a modern, sophisticated and beautiful arrangement.

「南部菱刺し 刺しが教えてくれること」
天羽やよい 著

天羽が南部菱刺しとの出会い、さまざまなひとたちや出来事との邂逅を綴り、作品写真とともにまとめた書籍。本展出品作品も掲載。
発行：東京図書出版　発売：リフレ出版
八戸ポータルミュージアム1Fカネイリミュージアムショップで販売中。



イベント情報： 申込は電話またはwebサイトにて8/23(金)より ◆電話 0178-22-8228

◀イベント情報 webサイト

①トークイベント
「刺しが教えてくれること」
天羽やよい（南部菱刺し制作者・青森県伝統工芸士）
開催：9月21日(土) 13:30-15:00
会場：はっち2階 ギャラリー2
定員：30人程度
※要申込・先着順。定員になり次第締め切り

②南部菱刺しアカデミックトーク
「八戸と南部菱刺し ～用の美の魅力について」
川守田礼子（八戸工業大学 教授）
伊多波麻衣子（八戸ポータルミュージアム学芸員）
開催：9月22日(日) 13:30-15:00
会場：はっち1階 シアター1
定員：40人程度 ※要申込・先着順。定員になり次第締め切り

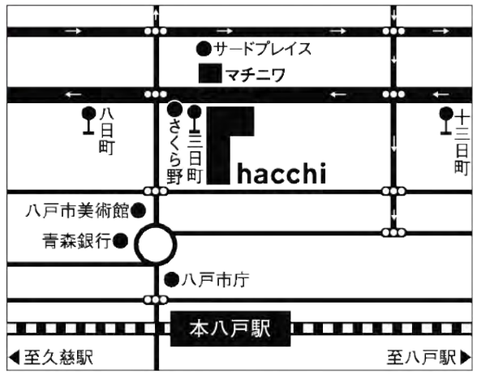
〈アクセス〉
バス｜八戸駅東口から八戸市中心街方面行き（25分）鉄道｜八戸駅からJR八戸線「本八戸駅」下車（徒歩約10分）
※一般駐車場はございません。近隣有料駐車場をご利用ください

>>> website
hacchi.jp

>>> Facebook
@hacchi8

>>> X
@hacchi_staff

>>> Instagram
@hacchi_hachinohe



八戸ポータルミュージアム はっち
〒031-0032 青森県八戸市三日町 11-1
TEL 0178-22-8228 / E-mail hacchi@city.hachinohe.aomori.jp
開館時間 9:00-21:00 ※入館無料 / 休館日 火曜日、年末年始（12/31-1/1）

Hachinohe Portal Museum "hacchi"
Add 11-1 Mikka Machi, Hachinohe City, Aomori Prefecture 031-0032, Japan/Open Hours 9:00-21:00 *Admission Free Closed Tuesday, New Year's holiday (Dec 31-Jan 1)

「冬の間に織り上げた麻布を持って町場へ出かけ、その６から７割で、裏打ちのための古手木綿や、刺すための木綿糸に替えた。織った布全部を、家族の衣類にできたわけじゃないんだなぁ」と、田中忠三郎さん※1がおっしゃっていたことがあります。
とにかく、北前船によって、京、大阪から運ばれてくる古手木綿はとても高価で、武家や商家の人たちがこの古手を着ていたそうです。
麻を着た女たちは、織った麻布を古手木綿や糸に替えた後、町場を往く木綿の着物を着ている人たちを、どんな思いでどんな目で見ていたのでしょう。
羨ましかったのか、妬ましかったのか、農家に生まれた我が身を嘆いたのか、憤ったのか。
自分が狭量のせいなのでしょう。刺しているとき、南部女たちのそのときの気持ちを、何度想像したか分かりません。
何も感じなかったとはどうしても思えず、そんなことがとても気になってしまいます。

そして、もうひとつ、家の中での女たちの位置はどうだったのだろうか。
相馬貞三さん※2 にお会いした時に聞いた難しいお話は理解できませんでしたが、そこに入る前のほんの数分、こんな話をしてくださいました。

―― 母ちゃんが機に上がると、父ちゃんも子供たちも洗濯や炊事を引き受けて、母ちゃんを助けたものなんです。昔は男尊女卑なんてなかったんですよ、そんなことしてたら生きていかれませんから。機は女たちの聖域だったんでしょう――。

外で感じたであろう心状と、家での確かな場所。
便利に暮らしながら「自己実現」と言う言葉を耳にするいま、あしたへ命を繋ぐことで精一杯だった、昔々の南部女たちへ問うべきことは何もなくて、ただ問われ続けています。

＊

数年前、テレビの将棋番組でとても興味深い言葉を聞きました。８１升の盤上で、４０の駒による手は、１０の６０乗以上あるとのこと。数の単位では、不可思議の領域で、盤上は宇宙なのだそうです。棋士たちは、きっと勝敗だけではなく、その先にある宇宙を見たくて、精励しているのかもしれませんね。
笑われてしまいそうですが、私はこのとき菱刺しのことを考えました。

模様は三百数十個あり、地刺しも４０位あります。色だって使えます。１０の６０乗とか 宇宙とまでは言えなくても、もっといろいろなことができるんじゃないか。奇を衒わず、でも新しい顔をした、あちらに居る南部女たちにも喜んでもらえるような、そんな刺しに出合ってみたい。

世の中とは、かなり隔たった場所になってしまった感じもありますが、いつもの定位置、この現場にとにかく座って針を持ち続けたいと思っています。

天羽やよい　２０２４年 9月

※3

天羽やよい（1948 年東京生まれ、1975 年より青森県八戸市在住）

南部菱刺し制作者で青森県伝統工芸士。南部菱刺しのさまざまな型こ（菱形の模様）を組み合わせ、まるで絵筆で抽象画を描くように、針と糸で独創的な菱刺しを施す。青森県民芸運動の中心人物であった青森県民藝協会会長の相馬貞三氏（1908-1989）との邂逅や民俗学者・田中忠三郎氏（1933-2013）との交流を経て、南部菱刺しの生まれた歴史的背景と菱刺しを遺した「名もなき南部女」を想い刺し続けている。

※1　田中忠三郎（1933 ～ 2013）
下北郡川内町（現むつ市）生まれ。独学で遺跡発掘や民具の収集・研究に取り組んだ民俗研究家。小川原湖民俗博物館館長、（財）稽古館館長を歴任。天羽が独学の師とした「南部つづれ菱刺し模様集」（1977）著。

※2　相馬貞三（1908 ～ 1989）
南津軽郡竹館村（現平川市）生まれ。柳宗悦の『工芸の道』の影響を受け、日用品のなかに美を見いだす民芸運 動を展開。青森県民藝協会の創立者であり、民芸品の 研究のほか民芸品の商品開発や作り手の育成などに尽力した。

※3《南部わらべ》2019（PHOTO: 山本貴士 / kodica studio）

「天羽やよい展 名もなき南部女に捧げる刺しの花」展示風景

【生活の中から生まれた刺し子】

「衣食住」とは、私たちが生きていく上で必要不可欠な３大要素です。時代や国・地域によってその優先順位は異なるものの、南部菱刺しが生まれた江戸時代後期、本州最北端の寒冷地・青森県において、「衣＝被服」は最も優先すべき事項だったのではないでしょうか。

日本で綿が栽培されるようになり保温性に優れた木綿の着物が普及したのは江戸時代でした。しかし、寒冷地ゆえに綿花が育たない青森県では、衣類の布は主に自給自足可能な麻で、綿布は北前船で上方から運ばれてくる貴重品。古手木綿（ 木綿の古布 ）でさえ高価なものでした。1891 年の東北本線上野青森全線開通により流通し始めたものの、貧しい農村部では大正時代まで女性たちが自家製の麻を紡ぎ、機で織り、家族全員分の衣服から下着、おしめに至るまで手作りしていたそうです。しかし、日々の農作業や子育ての合間をぬって賄えるのは必要最小限の量だけ。生まれてくる子どものおくるみが用意できず間引きが行われた話が伝わるほどに、布支度は切実で生命に関わる仕事でした。そのため、一度作った衣服をできるだけ長持ちさせるために補強し、さらに、寒さ厳しい青森の冬に備えて布の保温性を高めるためにも刺し子は必要不可欠でした。南部菱刺しの残された古作（実際に明治～昭和初期に使われていた刺しもの）は、着物の身ごろから袖先まで隙間なく刺しが施され、衣服づくりがどれほど大変な仕事だったかが偲ばれます。

こうした名もなき女性たちの手しごとが、２００年かけて数々の菱模様に結実し、「南部菱刺し」となりました。

農民の作業着には不釣り合いなほど意匠に富んだ精緻な刺しは、貧寒のなかで懸命に生きた女性たちのささやかな自己表現であり、家族を寒さから守りたいという祈りでもあったことでしょう。

「天羽やよい展 名もなき南部女に捧げる刺しの花」展示風景

「天羽やよい展 名もなき南部女に捧げる刺しの花」展示資料
「たっつけ（ズボン）」の刺しの部分拡大

【青森の刺し子　　南部菱刺しとこぎん刺し】

南部菱刺しとこぎん刺しは、他の地域の刺し子とは異なる発展を遂げ、布の補強以上に保温性を重視し、布の経糸と緯糸の間に生まれる小さな隙間（布目）に糸を通して埋め刺していく「目塞ぎ刺し」といわれる刺しです。糸は布の目に沿って直線に規則正しく並び気密性を高めています。南部菱刺しは、２、４、６と偶数目を、こぎん刺しは１、３、５と奇数目を拾って刺すため、前者は横長の菱形に、後者は正方形に近いかたちになります。

南部菱刺しの菱形の模様は「型こ（南部弁では「かたっこ」）」と呼ばれ、地域に伝わる菱模様の調査を行った田中忠三郎（1933～2013）の「南部つづれ菱刺し模様集」（1977 年）には、３４２個の型こが掲載されていました。伝統的な型こには、「あしがい」という菱形の枠があり、「あしがい」をもたずに型この周辺をうめる「地刺し」模様と合わせて、４００種類を超える模様が伝わっています。

南部菱刺しの古作、「ののつづれ」や「たっつけ」には、菱形の模様のほか、大部分を埋め尽くす運針も見られます。表地と裏地を重ねて縫うのはとても難しく、手早く刺し綴る運針が効率的に用いられていたことがわかります。

右が南部菱刺し、左がこぎん刺し。白は「うめのはな」、黄色は「ねこのまなぐ（目）」。同じ名前の模様でも刺していく目の取り方で形が変わる。

天羽の師である「南部つづれ 菱刺し模様集」。1000 部限定発行。

民藝運動は、1926（大正 15）年 に 柳宗悦（宗教哲学者）・河井寛次郎（陶芸家）・浜田庄司（陶芸家）らが提唱した生活文化運動です。柳たちは、「飾る」のための美術工芸品に対し、名もなき工人が作る「使う」ための日常の生活道具を「民藝（民衆的工芸）」と名付けました。そこに美術品とは異なる、各地の風土と生活の用に則した「健全な美」が宿っていると、新しい「美の見方」を提示したのです。
民藝運動は、青森で生まれた南部菱刺しにも光を当てていきました。

【用の美としての復興】

鉄道開通で綿布が普及すると、衣服の補強と保温のための刺しは次第に行われなくなっていきます。こぎん刺しは一時急速に衰退し、同じ目的を持った南部菱刺しも同様でしたが、後者は交通網の発達により運ばれてきた色染めの毛糸を刺しに取り入れるなど、装飾性を高めていきました。労働着のための刺しは娘たちの三幅前掛けで華やかさを増し、南部菱刺しは大正時代に最盛期を迎えます。
とはいえ、衣類から菱刺しが消えていくことは避けられず、大正の終わりに近づくと、菱刺しの技術の継承も途絶えかけていました。その途をつないだのが、八戸市の郷土史家･小井川潤次郎（1888 ～ 1974）でした。小学校教員だった小井川は、八戸や三戸で教鞭をとりながら郷土に根を下ろした民俗調査を行っていました。菱刺しについては、1923（大正 12）年頃、勤めていた八戸市の下長苗代小学校の同僚の教師・月館なか、工藤てつから知識を得たそうです。小井川は、学校の近所に住む女性に前掛けなどを刺してもらい、それを見本に教材となる刺し作りを女性教師たちに依頼し、小学校でも「菱刺し講習会」が開かれるようになりました。

柳宗悦（1889 ～ 1961）は、「地方的な日本刺繍として、之程多彩な美しい品を私は、見た事がない。知らなければスカンティナビアあたりのものと思うであらう。こんなに美しいものが日本に、それも北國の一隅に匿れて育っていたことを知って、驚く人は多いであらう」（「工藝 14 号」1932 年刊行）と南部菱刺しを評し、同誌には小井川が「南部の『菱刺し』」と題した寄稿文を掲載しました。柳は小井川に菱刺し作品を国画会に出品するように勧め、南部菱刺しの作品は東京でも好評を博しました。二人は書簡で菱刺しの創作に関する意見を交わしあっており、ハンドバッグや卓布など、時代にあった実用品に菱刺しの美を活かそうとしました。

【民藝運動と現代のものづくり】

近年、柳が提唱した「民藝」への関心が高まっています。海外においても「MINGEI」という日本語で紹介され、日本の民藝品は注目を集めています。なぜ、いま「民藝」への関心が高まっているのでしょうか。
「民藝」とは、生活の中で「使う」ことを前提とした道具です。そこにある「用の美」こそが「民藝」たる核で、柳は「美は生活の中にある」としました。その背景には、当時、急速に近代化が進む日本やアジア諸国で、西洋の文化や技術の流入により地域古来の文化や手しごとが失われていることへの危惧がありました。
そして、近年の「民藝」への関心の根源には、3D プリンターやデジタルアート、AI 技術の浸透で誰でも安易にモノを作り出せることに対し､手しごとの核である｢ひとのちから｣への羨望があると感じています。コンピューターでは作り出せない、人間だからこそ成しうる手しごとには、長い時間と忍耐、修練の先に得られる技術といった、血の通った確かな手触りが宿っているのです。オンラインやメタバースが常態化し実体を感じにくい現代社会において、手しごとは確かなひとの存在を感じられる縁なのかもしれません。
東北には、日本の中でも傑出した手しごとが数多く残されています。これらは、東北ならではの厳しくも美しい自然環境、貧困に反して培われた豊かな精神性など、陰陽相反する歴史を経て残されたものです。こうした歴史の、そしてデジタルではない「ひとのちから」が築いてきた流れの先端に、今私たちが生かされているということを、「民藝」と呼ばれる手しごとは思い起こさせてくれます。

南部菱刺しは、生活の中で行われてきた実用的なものづくりですから、誰でもその技法を使って刺すことができます。そして伝統的な菱模様は誰のものでもありませんので自由に使えます。しかし、同じ三幅前掛けを３人のつくり手が刺したなら、そこには、菱模様の配置、色彩、刺しの美しさなど、違いは必ずあるものです。
天羽やよいというつくり手の魅力は、どこにあるのでしょうか。

東京都出身の天羽やよいが南部菱刺しと出会ったのは、八戸市に移住した翌年の 1976 年。公民館で行われた胸部 X 線検診のレントゲン車の中でした。男性技師に菱刺しの三幅前掛けの写真の載った雑誌記事を見せられ、習ってみるように勧められたのです。「苦手な針仕事」に興味も沸かず、その時のことも忘れかけていた翌年、偶然立ち寄った書店で引き寄せられるように田中忠三郎著「南部つづれ菱刺し模様集」を手に取ります。はじめは模様を眺めるだけでしたが、そのうち本に載った写真と刺し図を頼りに刺し始めました。誰かに習うこともなく、ただ一冊の本を師として刺し続けた天羽の作品は、独創的な模様の組み合わせと草木染めの色彩が高い評価を得て、展示会に教室にと活動を広げてきました。

そんな中、天羽の針が止まる出来事が起きます。1995 年の阪神・淡路大震災です。

自分の仕事を活かして復興支援にあたるボランティアの姿を見て、自分の「菱刺し」という仕事が何の役に立てるのか自問自答する中、針を進めることができなくなったのです。

菱刺しは、布の補強と冬の寒さを凌ぐ保温のために農村部の女性たちが生み出したものです。生きるために必要不可欠な衣服のための、命に連なる手しごとだったはず。なのに、今の自分は目新しさを追った実用性に欠くものを作っている…。これまでの自分の刺しに意義を見い出せなくなった天羽は、仕方無しに菱刺しの歴史に立ち返り、南部の女性たち、南部女と同じ刺し・同じ時間を感じることができる、「総刺し（布一面隙間なく刺し埋める刺し）」だけをやっていこうという答えに辿り着きました。そして、もともとの菱刺しの在り処だった「衣類」、この先も在り続けるだろう和服の「帯」に、自分の刺しの居場所を定めました。

歴史と「南部女」を胸の軸において再び針を進める天羽でしたが、2011 年の東日本大震災を経て、湧いてくるのはどこか「いずい＊」感覚。それは、何色もの糸で刺し分ける帯への違和感でした。その居心地の悪さに耐えかね、天羽は一色の糸だけで刺しを行うようになります。そしてある日、刺しているときに

「あたしたち、毛糸なんて見たことないよ。そんな（多彩な）刺しはやったことないよ」

と、南部女の声を聞いたといいます。天羽は、はっと思い返しました。
「阪神・淡路大震災の後、自分の中に据えた『南部女』は、これまでの自分が刺してきたような、華やかな色彩の菱刺しを見ただろうか。300 年前、糸や布の豊かさも色彩もない、ただ暮らしの知恵として育んできたものが『菱刺し』だったはず」
改めて歴史と自分の中の「南部女」に向き合った天羽の刺しは、南部菱刺しの特色ともいえる色彩をそぎ落とした一色の総刺しへと昇華します。色を変えずに刺すということは、ただただ布の端から端まで、横一直線に針を進め、繰り返していくことです。
「無心に針を進めることで、針と自分がひとつになる。そして刺した時間分の模様が浮かび上がるとき、そこに自分と刺しの存在の『確かさ』を感じる。」
そう語る天羽がたどり着いた制作の境地は禅的な思想にも似て、刺すことは名もなき南部女たちへの供養でもあります。

＊南部弁でしっくりこないという意味

【天羽やよいの南部菱刺し】

天羽の菱刺し、その造形的魅力は、独創的な菱模様の配置と色彩にあるといえます。

独学で刺してきた天羽にとって、菱刺しの師は田中忠三郎の「南部つづれ菱刺し模様集」でした。歴史と南部女を制作の軸においてからは、南部女の残した模様を一つでも多く世に出したいと、同じ繰り返しのパターンでも違った菱模様を入れています。1 本の帯に２００個を超える模様を刺したこともありました。数種類の大きさの違う型こや地刺し模様をぴったりと並べ、かつ、糸と布地の間を美しいコントラストに仕立てる意匠が創り出せるのは、長年書籍の中の型こに向き合ってきたからこそ得られた感性がなせる技なのかもしれません。また、天羽は「総刺し」という広い面を刺すことで表現可能となる、多彩な菱模様の組み合わせを何パターンも創作してきました。自ずと作品全体を俯瞰する目も養われたのでしょう。２m から４m の刺しを施す作品であっても、天羽が制作に際して準備する模様図面はほんの一部。そのパターンの中でその時思いつくまま自在に菱模様を組み合わせて刺していきます。

そして、作品の柔らかい草木染めの色彩。自宅の庭先や近くの原っぱなど、八戸で採取した植物で刺糸を染め、帯生地も自らが織ったものを使っています。南部菱刺しといえば、三幅前掛けの、緑、臙脂、橙、桃色、紺色と、はっきりとした強い色彩の組み合わせが思い浮かびます。こうした色彩について、菱刺しの調査・研究行った鈴木堯子氏は「自然の中の色を取り入れた健康的な配色」と評し、青森という土地に起因する独特の色彩感覚であろうと考察しました（「改訂新版 菱刺しの技法」1992 年）。天羽の色彩に関しては、もともと強い色が好みでないこと、伝統的な作品や土地の刺し手が使う色に触れることなく独学で制作してきたこと、早々に草木染めの糸をつくり始めたことに起因すると考えられますが、最終的に、制作に行き詰まって針が持てなくなったときに立ち還ったのが、浅葱色の麻に白・黒の木綿糸で刺していた、カラフルな毛糸刺しが定着する前の南部菱刺しだったことが大きいでしょう。色数を削り柔らかい中間色にしたことで、刺しのふっくらとした陰影が型この美しさを強調するがゆえに、天羽の独創的な意匠が強調されているように感じられます。

天羽は夫の実家での暮らしのために八戸市に移住しましたが、その結婚生活が終わった時、なぜ東京に戻らないのかと聞かれることもあったそうです。すでに東京でも作品を発表していた天羽にとって、作家としての活動は地方よりも東京のほうが良いはずです。

「この土地を離れたら、刺しが変わってしまう。青森で生まれた刺しは、この土地と繋がっている。土地から生まれたものは、その土地の「氣」を受けて生まれたもので、わたしもここの「氣」をいただいて作っているから」

と、天羽はいいます。家族と離れて一人になった時、刺しだけで生きていくことを決めて「全てお任せします」と、小さな貸家で決めた時から、何かを望むのではなく来たものを受け取ってきただけだという天羽。

歴史と南部女が伝えてきた、青森県南部地方の風土から生まれた南部菱刺しとの対話こそ、これまでもこれからも天羽の作品の言葉にできない魅力の根源なのかもしれません。

●天羽の仕事道具（右）
●《星夜》2020 年（中央）

天羽やよい展トークイベント

刺しが教えてくれること

天羽やよい

進行：伊多波麻衣子（八戸ポータルミュージアム学芸員）

［伊多波］本日ご来場のみなさんの中には、天羽さんのことをすでにご存知の方も多いと思います。天羽さんの南部菱刺しとの出会いはとてもユニークで。多くの方は、菱刺しが素敵、わたしもやってみたい、作ってみたいというような興味関心から始める方が多いと思いますが、天羽さんの南部菱刺しとの出会いはちょっと違っていて。そのあたりからお話を伺っていこうと思います。

［天羽］天羽やよいです。こんにちは。ようこそいらっしゃいました。上がり症でうまくお話できるかわかりませんがよろしくお願いいたします。

27 歳のとき、昭和 50 年に八戸に来ました。義父が亡くなって 1 人になってしまった姑と同居することが決まりまして、それで八戸に来ました。1 歳 9 ヶ月の長女をつれて来て、その年の暮れに長男を生みました。翌年の何月頃だったか、回覧板が回ってきまして、その中にレントゲンの検診を受けてくださいというお知らせがあって。父方に結核で亡くなっているひとがたくさんいたり、父も結核を患っていたというのもあるんですが、そんなことが原因だったと思うけど、その検診を受けてみようと思ったんですね。

その検診が終わって、ぱっぱと車から出ようとしたら、レントゲン技師の年配の男の方に「奥さん、奥さん」って呼び止められて。「この土地にはこんないいものがあるんだよ」って、あんまり明るくない薄暗い検診車の中で三幅前掛けの 2、3 枚のカラー写真で載っている記事、雑誌を見せられました。でも、それを見ても、全然興味が湧かないんですよね。その人が続けて言うには、「田舎を歩けばね、まだ刺しているおばあさんがいるだろうから、ぜひ探し出して習いに行きなさい」って言われました。でも、「田舎を歩けば」って言われても、前の年に横浜から八戸に来たばっかりで何もわからなくて。どこが田舎なのかね、全然わからないし、それにその人がせめてね、刺しているおばあさんっていう人を知っているなら――例えば五戸の何とかさんがいるからそこに行ってみなさいって言うんだったらまだわかるけど。その人は知らないんですよ。刺しているおばあさんがどこにいるかね。でも自分で探し出して習いにいけっていうわけですよ。

私は近眼なので近づいて雑誌を見てみたら、どうやら針仕事らしい。もうはっきり言って針仕事は大嫌いなんですね。いまでも針仕事は嫌いで。もう全然、スルーですよね。だけど、雑誌の右側に「南部菱刺し」って書いてあったことだけは頭に残っていました。

それで、そういうことは全然忘れていたんですけど、義母に頼まれた用事があって、バスで街に行ったんです。十三日町の、そこにあった「三春屋」さんに買い物の用事があって。バスを降りると低いアーケードが続いていて、アーケード下にはお店の看板が見えなくて。「三春屋さんはどこですか？」って聞いたら、「ここです」って答えが返ってきて。目の前に立っていたんです。そして、用事が済んで。今みたいにひっきりなしにバスがなかったので、次のバスが来るまで本屋さんに行って待ってようと思って。昔、伊吉さんって本屋さんがあって、私が行きたいのは、そのお店の小説があるところでした。だけど、入ってすぐ左側のところにものすごく何かを感じるんですよ。どうしてかわからなかったけど、そこは実用書の場所なんです。私はあんまり実用書を買って何かを作るとか、そういう経験をしたことがないのでね、全然用がないはずなんですが、ものすごく強く何かを感じるので。ずっとずっと背表紙を追っていったんですよ。そうしたら、ちょうど上から 3 段目ぐらい、目の高さぐらいところに『南部つづれ菱刺し模様集 田中忠三郎』っていう本が 1 冊だけあった。それが目に入ったときに「あっ、去年のおじさんが言っていたのがこれだな」ってわかって。横長のね、3 センチぐらいの厚みがあるその本を手に取ってみました。

別に作り方が書いてあるわけでもなくてね。ただただ菱形の模様だけがダーって並んでるの。なんかね、あれ見たときにすごくいいなと思って。あの佇まいに捕まっちゃったって感じですかね。すごくいいなと。どうしてだか自分でもわかりません。作りたいと思ったからとかじゃなくて。「刺す」って意味もわからなかったし。そもそも針仕事が嫌いだし。だけど、本を気に入ってしまって。そして本の値段が 4,800 円だったんですよ。今から約 50 年前に 1 冊の本が 4,800 円って猛烈に高いですよね。今なら 10,000 円以上するんじゃないでしょうか？お店の中の柱の陰に隠れて、お財布のなかを見たんです。そしたら、あったんですね。4,800 円。もしなかったら、戻ってまで買わなかったです。

そして、結局、1,000 部限定版の 456 番が私のところに来ました。

最初はね、子供もまだ小さくて手がかかるし、義母の営む雑貨店での店番の仕事もあるし、忙しいのでゆっくり本を見ることはできなくて、ただ見てたのね。その本に 2 枚の三幅前掛けのカラー写真が載っていて。私が好きなのは、その 2 枚目のほう。今、五戸の公民館に実物があるんですが、1 枚目の写真の刺しは手が良くてね。ものすごく美しいんだけど、あまりに美しすぎるっていうか…。対して 2 枚目はね、実に人間的っていうか、（刺した）この女の人の気持ちがわかる感じがするんです。時々、別の糸がすっと入ってきたりして、なんかすごく生活感が感じられるなって。本の一番後ろのところに模様図が何ページかにわたって方眼紙に描いてあるんですね。それと 2 枚目のカラー写真を交互に見比べていました。そのうちに、だんだんだんだん手がムズムズしてきたのかな。コングレスとレース糸を買ってきまして。でも、見てるだけでは刺せないですよね。間違えるっていうか、どうしてこうなっちゃうかわかんないって試行錯誤を相当長くやりましたね。方眼紙が 2 マスが黒くなってるんですよ。これは 2 目のことなんですけどね。だけど、（方眼紙の）箱（マス）が二つ黒いっていうことは、糸で見たときに 3 つ飛ばないと箱 2 つにならないんですよ。わかります？ 方眼紙と模様の関係性がわかるまでがものすごく大変で。だから、どうしてこうなるのかわかんないし、それでも刺すことは面白かったです。どんなにわかんなくても、刺すことは面白かった。

［伊多波］天羽さんが刺しを始めた時は、本物を見たことがなかったんですよね。私は初めて菱刺しをやったときはコングレスに刺してみたんです。コングレスは透かしてみると布の織り目の穴がわかりやすい。でも、初めは言われないとわからないんですよね、この穴を糸で刺し埋めていくっていうことが。人に教えられればすぐわかるんですけど、本を見ただけだとわからないですよね。方眼の、この線が穴なのか、織り糸なのかわからなくて。天羽さんもそこで四苦八苦して独学で進めてきたんですよね。

［天羽］本当にそうなんですよね。それでね、それが何とかわかりだして。そして、私が好きだった 2 ページ目の三幅前掛けの、そのような刺しを長くやってきたわけなんです。同じ大きさの模様で、色を変えてね。（この写真の三幅前掛けは）パターンごとに色が違うでしょ。そういう刺しで、作ってたのはほとんどが額もの（額装した作品）ですね。（鑑賞として）見るものを作っていました。コングレスでもやりましたし。その後、麻布と木綿糸を売っているところを教えてくれた先生がいらっしゃいまして。すぐに弘前に飛んでいって、麻布と、木綿糸を買ってきて。ずっとその材料で作ってたんですけど、糸は白と藍色くらいしかなかったんじゃないかな。あとはこぎん糸ですから。布の色は、手持ちで 10 色ぐらいあったけど、刺糸は全部白だった。（材料については）それ以外のことはわからなかったので、それを使って 3、4 年刺していた。でも、あるとき気がついたんですよね。糸が白ばっかりだなって。

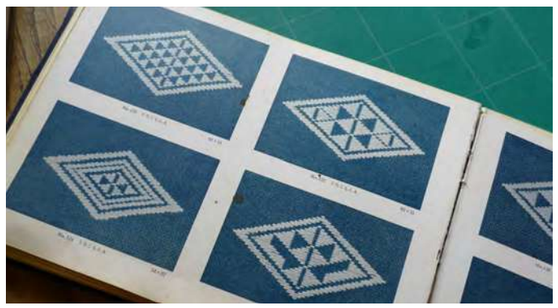
布の色は紺も赤もからしも緑もあるけど、刺糸は白ばっかりで。それにも気がつかないくらい夢中になって刺してたけど、ある時、白ばっかりだなと気がついて。そして、どうしてその本がうちにあったのかわからないんですが、「鍋一つで染められます」っていう染織の本をみつけた。多分「染織 α（アルファ）」って本。多分それだと思う。「鍋一つで染められます」って、玉ねぎの皮で染められるってあったから、やってみようと思って。白糸ばかりで嫌になっちゃったから。それで、（白糸を）染めてみたんです。そしたら真っ黄色の糸ができて。それは全く私が刺したい色じゃなかったんだけど、白い糸がこんな色になるのかって、嬉しくて、嬉しくて。それから染めの本を買ってきて。今度は染めに夢中になりました。媒染で色が変わることもだんだんわかってきて。媒染を変えて色数を増やしていきました。

そうして刺し続けているうちに、だんだん物（作品）が溜まってきたわけですよね。これどうすんだっていうわけですよ。家族に（制作にかかるお金は）ちゃんと自分で賄っていけよって言われたりして。だから売らなくちゃいけない。値段なんてつけられないし、展示会なんてやりたくなかったんだけど。もう周りがね、いろいろ勧めるわけですよ。展示会をやれってね。私は人前にでるのが苦手で、家業のお店番だけで十分だったんだけど、そうかと思って意を決してやってみましたが、その時には 3 キロ痩せました。展示会の間はご飯粒も喉を通らなくて、もうビールだけで、ビールとつまみだけで 5 日間くらいをしのぎました。本当なんです。緊張してね。物を作るってことは、自分の裸を見られてるようなものなんで

す。本当にそれをね、身にしみて感じたから大変な思いだったんですけど。
そのときの展示会場が通りに面したガラス張りで。展示品はテーブルセンターとか額もの（菱刺しを額装した作品）ばかりだったので、ガラス張りの通りから見える何かを飾ろうと思って、染め糸を何色分か竿に干した状態でかけてみたんです。（展示品に）値段つけちゃったりして、もうすごく恥ずかしかったけど、たくさん来てくださったんですよね。そしたら、染糸を掛けて吊るしたものと巻いてかごに入れて飾ってあるものを見て、みなさん「わぁっ」て驚いてくれて。お客様が「これ（染糸）は売っていただけないんですか？」って聞くんですよ。これは自分が使っているもので、売り物じゃないんですよね。それを聞いて、「これ、売れるんだ」と思ってね。びっくりしちゃった。

● 天羽やよいの染め糸

展示会には、たくさん生徒さんをお持ちの南部菱刺しの会の鈴木さんって方が見に来てくださって。展示を丁寧に見てくださった後で、「あなたには好きな模様がないの？」って言われたんです。好きな模様って何かなっていうか…。私、特別に（好きな模様は）何もないんです。いろんなもの（模様）を刺してましたけど、そう言われて、「そうか、みんな何か好きなものが、特別なものがあるんだな」って。物を見ればその人がどの模様が好きかわかるって。大体、梅の花はみんな大好きなんですけど。梅の花とか、べこのくら、キジの足なんか好きな人が多いですね。でも、私はべつにこれが好きとかが一つもないんです。今もそうですけど。



でも、好きな模様について指摘されたときにね、どうしてあのとき本を買ってきちゃったのかわかった気がしたんです。本が良かったんですよね。何だろう。あの本が持ってる佇まいの良さっていうのかな。何ともちょっと言葉では言えないんですけど。（たくさんの模様が）自己主張もなくね、みんな同じ形で、でもみんな何か言ってるような、そういう感じがすごくして。それが良くて買ってきたんだなっていうことを、鈴木さんに言われたことで気がついた感じがしました。

［伊多波］天羽さんは独学で学んでいらして、刺しを始めて３年後くらいに草木染めを始めるんです。そして７年目で１人で個展まで進んでいくんですよ。誰とも、先生とも出会わず、先程「お店番をして」っていうお話がありましたけど、おうちがご商売をしていたので、ずっと店番をしながら刺し続けてきて。習いに行くとか、移住してきたばかりでお友達もそんなにいなかったりで、本当に一人きりで刺しと向き合って、独学で長い時間を過ごしてきまして。誰かとグループ展をする前にいきなり個展をするっていうことが、本当に独特なキャリアだと思います。

［天羽］やりたくなかったけどね。

［伊多波］今日も展示会場にお友達がみんな手伝いに来てくれてますよね。そのお友達の後押しがあって今回の展覧会も実現していて。初個展のときもそうですが、みんなに後押しされて、そして、菱刺しとの出会いから偶然の連続でここまで来ていらっしゃるのが天羽さんの面白いところです。いろいろお話を聞いていると、自分から望んでしたことってないですよね。来るものを受け止めて、そしてわからないものも、すぐに答えを見つけるんじゃなくて、わからないまま受け取ってその時自分でできることをやって来ているっていうところがあって。習ってないからこそ、わからないからこそ、草木染の糸だったり、ショート前掛けとかね、新しいことをどんどん自分で発信している作家さんなんです。展覧会も菱刺しの作家さんには珍しく、個展が中心です。教室を始めてから、グループショーというか、教室の展覧会もありましたけれども、ほぼほぼ個展でやってきているので、とってもオリジナリティのある作家さんに育ってきたというか、個性の際立つ作家さんとして今まで歩んできています。
天羽さんとはここ 2,3 年ぐらいのお付き合いで、私も八戸にきて菱刺しという物を知って。クラフトのマーケットとかで見るような小さな小物と違って、天羽さんの総刺しって本当に絵みたいな空間性を持つ表現をしていてとても面白い作家さんだなと思っていたら、2014 年に十和田市現代美術館で「田中忠三郎の目」という展覧会に呼ばれて展示している作家さんでもあり、とても興味を持ったんです。
通常、菱刺しは、よくある型刺し（地刺しを交えず菱の模様＝型こを並べた模様）から初めて、いろんな試行錯誤を経てそれぞれつくり手が自分で新しい刺し模様を考えて行くと思います。今皆さんがイメージしている天羽さんの作品はとてもシンプルな色合いで、ものすごく細かい刺しが施してあるものですよね。どうしてそんなにシンプルに、美しい刺しになったのかっていうのを初めてお会いしたときにインタビューをさせてもらったんです。とても個人的な所感ではあるんですけども、天羽さんは、社会とか歴史とか、この刺しという技術が出来上がった歴史に対する提言を持って活動してるなって感じるお話を聞かせていただいたんです。知ってらっしゃる方もいると思いますが、改めてね、そのあたりを聞いていきたいと思います。
その天羽さんの作品と言えば総刺し。全部、見えているところは隙間なく刺す、ということ。そして、大正期に最盛期を迎える華やかな三幅前掛けのような色刺しとは全く異なる静かな色彩で、色刺しを辞めてしまったということ。それと、今回展示してある帯、あれはすべて天羽さんの手織りなんですけど。すでに織り機は手放したそうですが、自分で織りまで勉強して、自分で織ったものに刺すという制作姿勢。糸は業者さんにお願いして何度も調整してこれだってものを作ってもらって染めていますね。
総刺しに至るまで、あの菱刺しの華やかな色使いを辞めてしまうまでのお話を聞いてみたいと思います。お願いします。

［天羽］１人で勝手にずっと作っていたんですけど、１人でやってるからいつも思うわけですよ。「こんなんでいいのかな」って。いつも目先を変えてやってる。それで、本当に、このものづくりの、この姿勢のままでいいのかなっていうのが、いつもいつもわからなくて。ある時友人が、「ぜひ相馬（貞三）さんの話を聞きに行きなさい」って勧めてくれたんです。それで、弘前にある「つがる工芸店」さんにお話を伺いたいんですがってお手紙を書いたら丁寧にお返事をいただいてね。もうその当時、相馬さんは入退院を繰り返しているってことは友人から聞いていて。早く行ってお話を聞きなさいって言われてて。それで、相馬さんにお手紙を書いて、お返事をくださったので伺ったんです。
それは私 40 歳のときです。29 から始めて、10 年ぐらい経った頃なんですね。悩みながら作っていたときに、どうしたらいいのか、これでいいのか、いつも自分に聞くんだけど答えは出ないんですよ。1 人でやっているとね。それで伺ったんです。本当にありがたかったんです。
今日、そちらに、相馬さんの長女の方がいらっしゃる。ありがとうございます。
それで、「南部菱刺しをやってるものです」って、私、手紙に書いたから、その手のことを話していただけるんだと思っちゃったわけですよ。そしたらですね、3 時間。1 月の寒いときでしたよ。もうね、静かにお話されるんですよ。
ゆっくりと。とっても優しいの。だけど、とっても難しくて何にも理解できないの。精神的っていうのか、宗教的っていうのか。何て言うんでしょうね。今だからこう言えるんですけど。ものづくりをする人間に、つくっていく人間の根っこに必要なもののエッセンスを言ってくれてたんだと思うんです。でも、意味がわかんないんですよ。全然。言葉も難しいのがいっぱいでね。よくわかんない。本当に。相馬さんは私が全然わかってないことをちゃんとわかってたはずです。だけど、手を抜かない。人間が違うというか。全然違う人だったんですよ。ただ、私はお会いした時、ものすごくくたびれちゃったんです。正直言って難しくてわかんなくてね。肩が猛烈に凝ってね。結局、言葉をいただいても「よし、こうしていこう」というものはない。ここ（胸）に落とし込めるものがないから。だから、（その後も）それでまたどうしようかな、これでいいのか、これでいいのかってね。思いながら刺していたんですけど。
そしたら、あれが起きちゃったんですよね。阪神・淡路大震災がね。みなさんもご存知の通り、ニュースでボランティアの人たちが、物を作ったり、床屋さんとか料理をする人とか、大工さんとか音楽家が、被災地に行きましたよね。いっぱいそういう人たちが自分の仕事を持って（ボランティアに）行くじゃないですか。はぁと思って。私は、どうしていいかわかんない、こういう（自分のものづくりの）姿勢が本当にいいのかどうか、ウロウロウロウロして。せっかく相馬さんからいただいた言葉が、全然ここのところ（胸）に落ちてないまま、大震災を目にして大揺れに揺れちゃったわけですよ。それで針が持てなくなりました。
どうしようかなと思って。本当に大好きなことができなくなっちゃったわけですよね。それで、そのとき初めて（菱刺しには）歴史があるんだから一番最初のところに戻ろうと。そしたら、刺しが教えてくれるんじゃないかなって思って。
最初のところっていうのは、三幅前掛け（が作られた時代）じゃないんです。今回会場に展示している「たっつけ」（が作られてた時代）ですね。とにかく女たちが手を動かさない限り、家族に着せるものは何もないっていう、そういう時代の、麻しか着られなかった時代の女たちのところ。そこの歴史のところ。そこまで戻ろうと思ったんです。要するにそれは総刺しかあり得ないですよね。そこに戻れば、何か刺しが教えてくれるんじゃないかなって思って。

● 貴重なたっつけ（ズボン）とののつづれ（上着）。制作年代は不詳

でも、ずっとそこにいるつもりじゃなかったんですよ。ずっと歴史を考えていかなくちゃいけないとか思ったわけでもなく、ただ、とにかく刺せなくなっちゃった。好きなことができなくなっちゃったから。歴史の一番最初のところ――それ

ははっきりわかってないんですけど、歴史的にも菱刺しがどこから始まったっていうのもぼんやりしてるから。私も300年くらい前としか書けないんですけど、要するに江戸時代後期ですよ。18世紀の終わりくらいですよね。そこに戻ってみようと思った。それまでいろんなことをやってきたし、もちろん総刺しも、色刺しもやってたわけです。
これは古作じゃなくて申し訳ないんですが。これですね。私は色刺し、要は模様ごとに色を変えるカラフルな菱刺し。色を変えるごとに、布をこまめにひっくり返しながら刺していくんです。この刺しができなくなってしまって。
昔の、麻しか着られないような時代にはこの刺し（色刺し）はなかった。こんな贅沢な（手間暇のかかる）刺しはありえないです。
麻しか着られなかった女たちにとって、これがどんなに贅沢な刺しかっていうことが、このときになってやっとわかった。そしたらもうここ（色刺し）には戻れなかったです。今の私ですね。それで草木染めをやってきましたから、八戸の草木と、南部の女たちがデザインした模様―田中さんの模様集にある模様ですね。それだけでやっていこうって思って。今の展覧会で見ていただいたような刺しです。今のところはそこにいるっていうことです。

［伊多波］色刺しはすごく可愛くてカラフルで、あれが「菱刺し」っていう特徴で。同じ刺しでも津軽こぎん刺しのほうはもっとシンプルでスタイリッシュな色合いで。色が入ってくると本当にかわいらしくって華やかで、刺すのも楽しいんです。でも、天羽さんはそれができなくなって一色だけで刺すようになりました。天羽さんが立ち返った昔の菱刺しの資料も本日お持ちいただいてます。これは昔の南部の女性たちが刺した麻布の古布です。みなさんに回しますのでご覧ください。

［天羽］どうぞ触ってみてください。展覧会ではさわれませんから。これはどうぞ手に取って見てください。電気のない時代に、この目の細い布に、更に裏打ちの木綿を重ねて刺してたんです。それを、ぜひわかっていただきたいです。

［伊多波］ご覧いたただいている古布は、展示している「ののつづれ」と同じ、麻でしょうか。とても柔らかいですよね。

［天羽］昔の麻は私達が考えているものとは違いますよ。とても柔らかいです。歴史をね、考えなきゃいけないんだって、そこまで戻ろうって思ってだんだんわかってきた。歴史を考えるようになると、華やかな色刺しをしていた女たちと、一色の糸で横一線に刺すしかなかった、麻しか着られなかった時代の女たちと、２種類の南部女が自分の中にできてしまって。そういうことも、総刺しをやってるうちにだんだんと刺しが教えてくれるようになったんですね。歴史を考えなければ、ものは頭だけで作れるんです。
私は18年、気がつきませんでした。阪神・淡路大震災が来て刺せなくなるまで、頭だけでものを作ってました。頭だけでもものは作れるんです。それがいいとか悪いとかの話じゃなくて、そのことに気づかされたっていうか、自分で18年やってきてみて、もうそこに戻れなくなってる自分がいるときに、刺しがそうやって教えてくれたんですね。
そして、頭だけで作れなくなったときにですね…、もちろんデザインするときには頭もいるんだけど、頭だけじゃ済まない何かがどうしても必要なんです。この、一色で総刺しをやるっていうときには。色刺しには遊びっていうか、楽しいっていう部分があるんですが、総刺しだけだと刺しているのが楽しいっていう感じではあまりないですよね。私は楽しいけど。昔の南部女たちはとにかく家族に（衣服を）着せるためにやってるんで、楽しいとかそういうものはなかったと思うんですよ。そこで、頭以外に必要なものは何かなって考えたとき、これが、とてもとてもとても難しいんですけど、必要なのは「想像力」なんだって。想像力が必要だと思うんです。歴史っていうのは、こういうこともありました、そういうこともありましたってね、菱刺しのつらい歴史、そういった事実をたくさん知る必要はないと思うんです。ただ、肝心なことだけ、例えば、貧しさのなかで餓死っていうことが身近だったという、その事実１個だけでもいいと思うんです。この１つの事実をここ（胸）に重く入れて、そして歴史を自分の方に引っ張ってくるんじゃなくて、想像力を働かせて21世紀に住んでる今の自分、生きてる人間が、乏しい想像力をいっぱい働かせて、自分が向こうへ行かなきゃいけないんですよね。
それがものすごく難しい。こっちへ引っ張ってくるのは簡単です。言葉で言えるから。でも、そうじゃない。ちょっとね、何ともわかっていただけるかどうかわからないけど。とっても難しい。やっぱり想像力以外にないと思う。目新しいものをやる分には頭だけで作れるけど、歴史を考えたらね。例えば、田中忠三郎さんにね、「これ何だかわかるか」って見せられたものがあるんです。みなさん「襤褸（ぼろ）」っていうのはご存知だと思うんですけど。ドンジャ（着物型の掛け布団）って言うんですか、田中さんはパリまで展示で持っていったらしいけど。古い布をいっぱい継ぎ当てて、どんどんどんどん継ぎ当てをして作られた着物ですね。その襤褸のこれくらいの大きさで、10倍ぐらい汚いものを想像してみてください。それを見せられた時、全然なんだかわからなくて、なんですかって聞いてみたら、「昔、お産のとき、この上で子供を生んだ布だ」って。その子が無事に育ったのか、死んだかもしれない。もしかしたら間引きされたかもしれないし。そういうね、ものすごく怖いっていうか、つらい厳しい歴史があったんですよ。そういうね、ぼろ雑巾よりもひどい布のうえで、女たちは子供を生んだんですね。生まれたのはまだいいけど、果たしていくつまで育ったのか。餓死者が当たり前のように道端で行き倒れる、そういうのが珍しくない時代だったってこと。例えばそれ一つでもいいけど、それをここ（胸）に置いてみる。そこまで想像力で行くのは、こんな豊かな時代では難しいですよ。電気もあるしね、もう（衣服を）作らなくたって、何でも着られる。そういう時代だから、それをするのはすごく難しいけど。絶対やっちゃいけないのが、歴史をこっちに引っ張ってくること。今の21世紀の頭で考えちゃいけないと思うんですよ。かっこよくしちゃいけない。何とか向こうへ行かなきゃいけないって。それもね、刺しからみんな教わったんです。
間引きも身売りもあったし、（菱刺しは）そういう時代の刺しだったってことですね。だからそういうことを考えると、うかつな刺しはできないなってね。ろくなものは作れてないんですよ、私。みなさんがね、「すごいですね、すごいですね」って言ってくださるけど、全然すごくないの。あそこ（展覧会会場）にある「たっつけ」ですね。あれの足元にも及ばないですよ。かなわないんです。あの時代の南部女を思うと、かわいそうでかわいそうでしょうがないの。
本には書いてあるんですけどね、私、店番してるときにね、いきなり「あんたは東京の人間だから、あんなもんに目をつけたんだ。」って言ってきたひとがいて。はっきり言うとね、私が菱刺しに目をつけられたのよ。全然目なんかつけてないんです。でも、そんなふうに地元の人に言われちゃうんですよね。
さっき伊多波さんが紹介してくださった十和田で展覧会をやったときなんかもね、忠三郎さんが集めた古作をいっぱい展示したんだけど、「こんなもの見たくない」っていうお年寄りがいるんですよ。だから、それぐらいつらい歴史、物語を語りついできた人たちだから、あんまり見たくないんでしょうね。もう思い出したくもない。そういう気持ちはちょっとわかるけど。でも、私はよそ者だから。こんなにも大変な思いをしてね、やりたくてやったんじゃないだろうなって思っちゃうわけですよ。家族のためにどうしてもやんなくちゃいけないから。麻しか着られないから、種まいて糸を作って、織って。それで刺したわけでしょう。どうしてもそこ行っちゃって。その苦労を思うとかわいそうで仕方がなかったですね。

［伊多波］天羽さんは、この型こ（模様）があるから、自分がこれを仕事にして生きていられるっていうことをすごく重く受け止めてというか。私も東北出身なんですけども、長く関東の方で仕事をしていたので、あんまりこの土地勘っていうものがなくて。東北らしい暮らしをしてるわけじゃないんですけども。やっぱり関東とこちらを比べると、お祭りとか、暮らしの決まり事、民間信仰がとっても身近なんですよ。特に菱刺しをやっていた農家の人たちは、秋から冬にむけて農作業が終わっていくと、その後はお祈りとかお祭りとか家の神様の行事がたくさん続くんです。物資が乏しい中で、もう来週にはお祀りする団子を作らなきゃいけないとか、決まりごとがあって。それも全て手作りで。女性たちも男性たちも祭りや祈りのものを作るんです。八戸市の博物館が出版している本のなかにも、「こんなに忙しいのに祭りがいっぱいある」っていうのを２度３度繰り返し書かれるぐらいで。人の力ではどうにもならない、祈るしかない厳しい環境で暮らしていたことがわかります。それを思うと、女性たちの刺しっていうのはただの造形とか（民藝で言う）用の美じゃなくて、八戸の三社大祭やえんぶりで男性が豊作を祈るハレの日の祈りだとすれば、菱刺しっていうのは「もの」ではなく女性の家族を思う日々の祈りの振る舞いだなって感じています。刺しっていうのは、ものづくりであり、祈りの振る舞いであり、日々の暮らしの中の仕事であった。様々な意味が重なり合って菱刺しが伝えられてきたことを忘れないでほしいなって、天羽さんのお話しを聞くたびに思っています。歴史や生まれた背景が見えると、菱刺しはただの刺し子ではない特別な手しごとに思えますし、日本三大刺し子の山形庄内刺し子も、模様にお守りの意味があったり、こぎん刺しも肩に刺している四角い模様に魔除けの意味があったりします。ものづくりは、それが生まれた土地に根付いているものだと天羽さんと話すたびに思っております。
天羽さんは厳しい暮らしの中で菱刺しを遺した南部の女性たちに思いを寄せて刺し続けてるいるのですが、今回の展覧会の前の、2017年の個展には「供養展」という名前をつけて行っています。八戸でも開催しているのですが、ご覧になった方はいますか？南部の女性たちの苦労だったり、生き方だったり、人生を供養するという意味で、帯を展示した展覧会だったんですよね。天羽さんの11回目の個展であり、東京では圓光寺さんで開催しました。そこで、南部女にお経をあげて供養していただきました。
その展覧会のことと、そして私の浅ましい考えでは「もったいない」としか言えないのですが、青森の恐山で供養のために総刺しの帯を一本お焚き上げなさったこと。そのことをお話しいただけますでしょうか。

［天羽］その前に、ごめんなさい。言い忘れたことがあって。相馬さんのことなんですけど。40才のときにお話を伺って、そのときはなんにもわからなくて、そのままになっていたんです。そしたら今から11年前、65歳の時、それこそ総刺しをしているときに相馬さんの声を聞いたんです。総刺しってとても不思議で、ほとんどそういうことはないんだけど、スーッと集中してると１回刺しの中に入った感じするんです。そして、刺しから出られるときがあるんですよね。ものすごい大きな、すごい広がりのなかに出してくれる時があって。そういうときに、チラッチラッってデザインも浮かんできたり、言葉が飛んできたりするんです。そのときに相馬さんから言葉をいただいたんですよね。「身体と生活を常に点検して整えなさい。ものはそこから生まれる」という言葉。私、お話を聞いて25年経ってるんですよ。その時から何もわかってなかったでしょう。きっと相馬さんは上から見てたのよね。まだ何にもわかってないんだなって。だから、自分が生活の上で実践できるかたちで「身体と生活を常に点検して整えなさい。ものはそこから生まれる」って言葉をくださって。私は総刺しをしている中で、その言葉を捕まえることができた。

そのときは嬉しくて嬉しくて。もう相馬さんは亡くなっちゃってるけど、どうしようどうしようって。それで、相馬さんからのはがきと総刺しの帯を持って、青森の會田さんのところをお尋ねして、相馬さんのお墓参りをさせてもらったんです。相馬さんは見ててくれてたんだなって。こういう世界ってあるんだなって思いました。ありがたかったですね。まだ話したいことはあるんですけど、供養展のことですよね。
私、いつも目の前に模様集があって、そこから模様を選びながら刺してきたんですけど、ある時、やっぱり刺しに教えられたんですよね。私はこの模様で食べていられるって。この仕事だけで、他にパートとかアルバイトとかそういうことをせずに、とにかく好きなことだけをしていこう、食べられなくても何でも。離婚もしていろいろあったんですけど、好きなことだけやっていこうと思ってここまでこられた。それは、ずっと目の前にあった田中さんの模様集の、この模様たちのおかげなんですよ。南部女たちのデザインですよね。
それに気づいたら、ありがたくて、ありがたくて。どうしても南部女たちに感謝を伝えたくて。それをするにはどうしたらいいかなと。八戸ではいつもやってるような場所でできるんだけど、八戸と東京と 2 ヶ所で展示会をしたいと考えてて。そのときに、実はあちらにいらっしゃるんですけど、塚田恭子さんに大変お世話になって。塚田さんに電話をして、こういう気持ちで展示会をやりたいんだけど、どこかお寺ないかしらって相談しました。お寺が決まるまで探そうと思って。私としては（お寺での展示会は）当然のことだけど、それを言われたお寺さんにとってはやっぱり突拍子もないことだと思うんですよね。
東北の刺しの展示会を自分の寺でっていうこと自体が突拍子もないでしょ。そういうふうに感じていたので、なかなか見つからないと思ったんだけど、とにかく見つかるまで探し続けようと思ってました。もう帯はできちゃってるわけだし。そしたら、塚田さんが話しを聞いていただけそうなお寺があるって連れて行ってくれて。そこで和尚さんに緊張しながら自分が供養したい理由を説明したんですね。そしたらこちらへどうぞって言ってくれて。和尚さんについていったらそこは本堂で。ここでやってくださいって言ってくださって。鶯谷にある圓光寺さんって禅宗のお寺さんなのですけど、そこで供養展もしていただくことができて。図々しいことに、須弥壇に古作を上げていただいて、お経もあげていただきました。
その供養展をしたいっていうお話のときに、和尚さんから「後継者はいますか。」って聞かれたんです。「いません。」って言ったら、「100 年後に現れるかもしれませんよ」って言うんですよね。やっぱり禅宗のお坊さんっだなって。100 年後か、突拍子もないなと思ったんですけど。供養展が終わっても、その「100 年後に現れるかもしれませんよ」って言葉がずっと残っていて。私は好きだから、目が見えて、手が動いて、体に痛いところがない限りはずっと続けていけるけど、何か他に私がしておくこと、やることはないかなと考え続けてました。そしたら、やっぱり総刺しをしているときに、今度は「奉納」っていう言葉がやってきた。相馬さんの言葉が来たときと同じような感覚のときでした。
それで和尚さんに電話しました。実は帯を奉納したいんですけど、そんなことできるんでしょうか？もしできるなら、地元の恐山に奉納したいんですけどって言ったら、和尚さんがとても尊敬している禅僧がたまたま恐山の貫主の人だったんです。私もその人のことをラジオの宗教の番組で知っていて。その人の講演会をテープに録音して聞いていたんですね。円光寺の和尚さんも「僕も行きます」って言ってくれたんです。私はね、個人的なことだから、1 人で行きたかったんですけど。でもね、和尚さんが一緒にいてくれて良かった。恐山の受付で塔婆に書く文句を聞かれたんですよ。1 人だと何て書いていいかわかんないわけです。和尚さんがこうだって言って「南部菱刺しに関わったすべての女性たちの諸聖霊の供養」って書いてくれて。やっぱり和尚さんがいてくれて良かった。それと、半幅の帯――4m で 200 個の模様が入ってるんですけど、これも一緒に奉納させていただきたいんですって言いました。「いいんですか？燃やしちゃうんですよ」って言われて。私は天に、南部女のいるところに昇って行ってほしかった。だから「それがいいんです」って。奉納しました。5 月 29 日でした。

［伊多波］南部女に本当に帯を奉納するっていうことが、天羽さんの筋が通っているというか。行動力があって、これと思ったら本当に調べて実現してしまうところもすごいですけど。お焚き上げで一旦終わり、2017 年の個展以降は展示会をしないで細々と刺し続けて、好きなことだけして行こう考えていた天羽さんですが、こちらの書籍を出すことになりましたよね。そこにもいろいろな経緯がありましたのでお聞かせいただければと思います。

［天羽］これを説明するのはとても難しい。相馬さんの言葉をいただいた時、刺しの外に出られた状態ね。これは自分の意志では出られないんだけども。それがまた総刺しをしていたときにやってきて。一昨年、2022 年 2 月に南部女から声が来たんです。
阪神・淡路の震災があって以降、総刺しを始めた頃は、まだ色刺しをやってた。それはね、木綿が着られるようになってからの女たちが刺したものだってことをわかっていたけど、わかっていたけど、でも、それはね、部分刺しじゃなくて総刺しをしてるんだから許されるんじゃないかと思っていたんですよ。ちょっとは引っかかっていたけど、私が思いを寄せた南部女は麻しか着られない女たちってことはわかってたんだけど。その南部女と刺しているものが違うなんてことには気がつかなかったんです、私。だけど、だんだん、だんだん「いづく」なってきたんです。土地の人だったらわかりますよね。東京弁だとね、なんて言っていいかわかんないんだけど、とにかくもう「いづくて、いづくて」全然刺していられないの。それで、2014 年にはもう、色刺しができなくなっちゃったんですね。
あの前掛け、模様集に載ってたような刺し方ができなくなっちゃって。結局今、会場にある、ああいう感じのだけになっちゃったんです。そうなったのはいいんだけど、どうして刺せなくなるほど「いづく」なるのかが全然わからなかった。それがですね、一昨年の 2 月に南部女からの声が来ました。刺しの外に出られたときに声を聞くことができたんです。「私達、毛糸なんか見たことないよ、あんな刺しやったことないよ」って。それがね、東京弁で来たの。やっぱり（東京出身の）私だから、やっぱりね、南部弁じゃわからないものね。だから東京弁だったんですけどね。
そうやって言われたときですよ。はっと、やっとわかったんです。「いづい」のは、ここ（胸）にいる女たちが「私達、そんな刺しやったことないよ」って言ってるのが、私の体に「いづさ」となって出てたんだなって思ったんです。まあね、そのときの私、阿呆だったなってね。
震災のときに刺せなくなって、歴史と南部女をここ（胸）に置いたはず、麻しか着られない女たちを置いたはずなのに、色刺しはやってたんですよ。だから、私の中の南部女が 2 種類になっちゃってたんですよね。麻しか着られなかった時代の南部女と、木綿が着られるようになってからの南部女。三幅前掛けは、木綿を着られるようになってからの刺しですよね。その前の女たちはありえない。あの写真のような贅沢な刺しは、そのことだったなということを気づかされたことが、今の刺しのかたちになったひとつ目のきっかけ。それから、10 数年前からすごく気になっている言葉がありまして。「歴史というのは全て現代史である」という言葉。なにかで読んだのか聞いたのかわからないんだけど、それが気になって気になって。でも全然意味がわからないんです。南部女からの声と手元にいま刺しているモノと、ずっと気になってた「歴史は全て現代史である」っていう言葉、この 3 つが一緒になって、「本」っていうかたちが出てきちゃった。その時のことは言葉にならないんですけど。
私は本を作りたいなんていう人間じゃないんです。誰も知らないところでずっと刺しを、好きなことだけしていたかった人間なんですけど。本っていうのはやっぱり世の中に出ちゃうじゃないですか。そして自費出版ですから、ある程度売れていただかないと困るじゃないですか。世の中に出てしまうなって思ったときにものすごく逡巡があって。それと本を出すには文章を書かなきゃいけないですよね。人には頼めないことなんです。本には、やっぱり菱刺しの、今まで自分が刺しから教えられたことを書くしかないので、それは自分の言葉で書くしかないんだけど、でも書けない、書けないなっていう思いがあって。南部女の声をいただいて、それからずっとどうしようって考えてた。でも、あるときわかったんですね。
私は 11 回個展をしてきて、そのたびに模造紙にサインペンで何かしら文章書いてた。そして会場に張り出してそれを読んでいただきながら、もの（作品）を見ていただいてきたんです。ずっとそれをやってきたので、あれを書くつもりなら書けるかなと思った。そしたら 1 週間で書いちゃったんですよ。書いちゃったんだけど、今度は本にするのにどうしようかなとずっとわからないままでいた。そしたら、6 月の末に伊多波さんが今回の展覧会の打ち合わせでうちに来てくださった。「実は…」って書いてあった原稿、何ヶ月もどうしようかなって持っていた文章を出して、「本を作りたいと思うんですけど、どうでしょうか？」て聞いたのが始まりでした。

［伊多波］お話を聞いた時、展覧会を開催するので図録的なものでもいいのかなと思いましたが、本当にちゃんと文章を書いていらして。きちんと章立てて、こんなに一気に書けるのかって驚きました。今回の展覧会場入口に天羽さんのご挨拶を掲示してるんですけど、あれもお願いしたらあっという間に届くんですよ。本当に早くて。天羽さんは思ったことをぱっと言葉にして書いてらっしゃる。これまでの展覧会もすべて、十和田の展覧会でも自分のステートメントというか、文章を掲げて自分の責任のもと考えていることを発信して、それに沿った作品も発表している。作品とコンセプト（文章）が対になっている現代美術的なところがある作家さんだから、これはちゃんと文章として出した方がいいんじゃないかなって。そこで、編集者の方がお知り合いいらっしゃるということだったので、その編集者・深田恭子さんにいろいろお願いして、本ができたんです。
作家さんっていろんなことを考えながら制作している。もちろんここにいらっしゃる方たちも、それぞれの思いだったりこの地域の手しごとを世の中に出したいという思いで、活動してると思いますが、やっぱりかたちにしないとなかなか伝わらなかったり、そのまま消えていってしまうんですよね。100 年後に後継者が現れるかもしれませんよって、天羽さんのお話でありましたが、100 年後に誰かが現れたときに「形」が残ってないとそもそも立ち行かない。忘れられて消えてしまうんですよ。なので、形が残ることってとっても大事なんです。でも、「もし歴史を考えなければ何だってできるんだよ」って天羽さんがおっしゃったとおり、形はいろいろ転用できるし、形だけに限れば何でもできちゃう。でもやっぱり人の心を掴むというか、この菱刺しを持っていたいとか菱刺しの温かみみたいなものを感じるには、歴史だったり、ものの背景にある思いみたいなものがないといけない。芸術でも、いい作品って大体そうなんですね。何かしら目には見えない意味というか、意義というか、それを私はスイッチって呼んでます。自分が生きてきた中での記憶や思い出とか、みんなが内面に持っているなにかしらの琴線に触れるためのスイッチが仕込まれていなければ、いい作品とか、（後世に）残るものとは言えないかなって思っています。天羽さんの作品には、その琴線に触れるスイッチがある。
だから、本ができたっていうことは、これからも天羽さんの考え方だったり、南部菱刺しがどういう歴史を背負って今ここに残っているかということが残せた点でも、天羽さんが本を作ろうと思い立ったことは勇気がある功績だったと思って

います。この本は、自費出版で本当に天羽さんに儲けなんてほぼないです。でも、これ（本）を遺したいということは、天羽さんが作品を遺すのと同じように、言葉だったり、歴史だったり、物語―自分をここに立たせてくれてる青森というバックボーン―に対しての敬意の証明だったのかなと思って読ませていただきました。
文章と一緒に作品を見るっていうことで理解できることがたくさんあると思いますが、天羽さんの場合は作品を見るだけで（伝わる）力があるのかなと。ぜひ若い人たちにも見てもらいたい。（今回の展覧会の）ああいう展示の仕方じゃなかったとしても、インパクトのある、力のあるものっていうのは伝わるものがあるので、今後そういうものづくりの一つに菱刺しがなってくれたらいいなと思いますね。天羽さんの活動をみて、あとに続いてくれるひとがでてきたらいいなって。

［天羽さん］本当にそう思います。今回、会場にアフガニスタンの農民の刺した、農作業の袋を展示していますが、こちらはネパールの刺しなんです。この手の刺しって言うのは、刺繍と違って貧しい国に残されている。そういうところにこういう女性たちの仕事が残っている。こちらも手に取って見てみてください。

［伊多波］資料をご覧になっているあいだに、会場の皆様からなにかご質問があれば伺いたいと思います。ございますか？

［伊多波］質問がありませんでしたので、なかったときの（時間調整）のために、今回展覧会で紹介している帯ではない作品を見ていただこうかとお持ちしました。天羽さんの帯作品は、すべて天羽さんの手織りの帯に刺しています。その帯が終わったとき、また織り機で帯の麻布を織るのかというと、それはできないと。それでも、今後いろんなかたちで作品を発表してほしいなと思っているのですが…。これは会場にもあるピンクのコチニールの糸で刺した菱刺しの額装作品です。こういうかたちでも芸術的に高い作品になるので、刺しの今後の未来として、こんな作品に挑戦してほしいなと思うのですが…。

［天羽］帯は実用のものでなんですけど、額ものは観賞用なんですよ。そうすると、鑑賞に耐えられるものが自分に作れるのかっていうのがすごくある。難しいですね、やっぱり。とても難しい。帯の何本かは同じところが一つもないっていうのもありますけど、大体、5つぐらいから7つ8つぐらいの（パターンの）リフレインなんですね。同じパターンを繋げていくんです。でもそれは、額ものではあり得ないので、そういうところでは、やっぱり鑑賞に耐えるものを作るっていうのは、とてもとても難しいですね。だから、鑑賞用の額ものっていうのは、やるかどうかまだわからないです。帯があるうちは帯を刺すけども、だんだんと帯の（残りが少なくなって）先が見えてきてしまって、来年か再来年ぐらいまでかな、そうなると78歳で80歳に手が届くようになる。そうしたら、そのときにまた考えようかなと思いますけど。織りは、自分がズボラなので全然向かないの。きっちりやらなきゃいけないので。だから、また織りすることはない。その先はまだ考えてないです。

●天羽やよい《花火》2024年

［伊多波］本をお持ちの方はご覧になっていると思いますが、掲載されている帯作品の写真は、長い帯のほんの一部なんです。この一部分を天羽さんは繰り返しているだけだっておっしゃるんですけど、その菱形の中の模様をどんどん変えながら4m、3mの世界を刺している。これだけ長い空間を刺し埋めることができるひとにしかできない空間構成みたいなことが起きているように私は感じていて。それに対して、天羽さんはこの小さな額の方が難しいとおっしゃったんですよ。4mの空間に400時間かけて模様の世界を作っていくより、小さい空間に見せ場を作らなきゃいけないほうが難しいなんて、その感覚がとても新鮮というか。むしろ大きなものを作る方が難しいと思うのですが。

［天羽］こっち（帯のほうが）が楽よ。本当に小さいから簡単なんてことはありえません。全然そうじゃない。難しいですね。

［来場者］すいません、伺いたいことがあります。私は青森市こぎん刺しの歴史を掘り下げているんです。その間に若い方の最近の、例えば30代40代50代の作品を見る機会も作るようにしているんですけれども。すごく今、一部分だけ切り取ったような作品ですとか、模様だけの作品が多いですね、やっぱり。その歴史を深掘りしていく中で、気づいたのが、先ほど天羽さんがおっしゃった、「総刺し」っていうことに、真剣に向き合わなければならないのかなって。これからの人たちが刺しに取り組むっていうときに、お伝えしたい言葉があるとすれば、どういったことがあるかなっていうのを一つお聞きしたいんです。

［天羽］やっぱり歴史ですね、歴史。レイチェル・カーソンだったが「沈黙の春」を書いた方が言っていた言葉だったと思うんですけど、「知ることは感じることの半分も重要ではない」という言葉があって。その、「感じる」ためには、やっぱり想像力を働かせて、いかに自分がそこの現場、その南部女が生きてて、家族のために着るものを作らなければならなかったその時代へ、21世紀に生きてるけど、なるべくそれをとっぱらってそっちへ行かないと。絶対っていう言葉はあんまり使っちゃいけないかもしれないけど、わからないと思います。ただ、歴史を勉強しました。いっぱい本を読みました。いっぱい知ってます。そういうのは何の役にも立たないような気がします。生きたものとして、感じられるか。難しいことですよ。とっても難しいです。私も。だから相馬さんのね、「身体と生活を常に点検して整えなさい。ものはそこから生まれる。」もう、その生活をやる以外に、それで歴史のことを忘れないように生活する。日々を丁寧に暮らすとか、そっちが大事かも。でも、今の時代ね、ものすごく早いでしょう。そういう時代に、そういう中で生きている若い人たちに、私の言葉がね、どこまで入っていくのかは私にはわからないです。いくら言ったって、ぱぱっと検索すれば何でも出てくるんですよ。出てくるのは文字、字が読めてるってことだけ。何にもわかってるわけじゃない。でもわかった気持ちになるじゃないですか。文字が読めることは。南部女たちは読めない文盲がたくさんいたと思います。それでも彼女たちは、ああいう仕事をね、電気のない時代にね、目の細かい麻布に木綿の裏を重ねて刺している訳ですよ。そこに、その時代へどうやって自分が行けるのか。それは難しいですよ。こっち（現代）に引き寄せて、こっちの見方で理解しちゃいけない。私も難しいんです。だから今でも右往左往しながらやってるんですよ。でも、刺すのは好きだからね。駄目だなっておもっても、これが今の私なんですねって、相馬さんに語りかけて、刺したものはアイロンかけてしまっちゃうんです。

［来場者］ありがとうございました。（書籍にある）「ゴミになるな、土になれ」って言葉もすごく響きました。

［天羽］あの言葉ね、宮本常一さんの。あれは、ノンフィクション作家の佐野眞一さんだったかな。その人が、宮本常一が歩いた道をたどるっていう彼の仕事を考えるっていう番組を今から20年ぐらい前にやっていて。ちょっと興味があったのでテキストを買ってきて、テレビで見たんですけど。その中で佐渡の裂織にすごく惹かれた人が出てきて。その人は関東の人でね。裂織がすごく好きになっちゃったから佐渡へ渡っちゃったんですよ。私と全然違うの。彼女は好きで行ったけど、私は、関係なくポンと来ちゃっただけ。彼女は好きで佐渡まで行ったから意識が違うのね。彼女が宮本さんにお会いしたときに、地元のものをね、土地に根付いているものを、その土地の人間じゃないものがやっていくためには何が必要ですかって聞いたそうなんですよ。そしたら一言、「ゴミになるな、土になれ」って宮本さんが言われましたって。その言葉を聞いて、ドキっとしてね。これは私のことだと思いました。私が言われてるんだなと思った。それから20年ぐらい経ったけど、ゴミにならないようにしたいと思うけど、ゴミって何かなって思うし、土になれって言われたけど、土になるってどういうことなのかなって思う。なんでしょうね。土っていうと私が思うのは…、南部女たちの刺しは労働着で、彼女たちの刺した糸目は土を噛んでいたはずなんですよ。働いて、畑仕事ですから。土を噛んでいたはずなんです。そういうことを考えると、あんなにも大変な刺しの仕事をしたのにね、「あんなもん」とか「こんなもの見たくない」って言われても、家族のためにしたことでから。そして、（そういうことを仰る）ほとんどの人にとって、大変な刺しの仕事をした南部女はご先祖様だったはずですよ。農民の方が絶対的に多いんですから。このあたり八戸は、武士や商家の人が多かったはず。八戸市は城下町だから。ここに住んでた人は刺しはやってなかった。そういう人たちは木綿が着られたんですよ。
だからね、どうなんでしょうね。土になるってわかんない。未だにわかんない。何を作ったらそうなれるのか。私は帯を作っているけど、実はね、って、実はって言うほどのことでもないんですけど。「あんなもん」とかさ、言われているでしょう。それを実際に、よそ者の私が聞いちゃって。南部女がかわいそうでかわいそうで、ずっと仕方がなかったんですよね。だから、帯の世界で菱刺しが生きれば、すごくおしゃれなものとして世の中に出るじゃないですか。だから、南部女の代わりにね。リベンジ、じゃないんですけど。何て言ったらいいのかな。なんとか、彼女たちが遺した仕事が、帯の世界に残ってほしい。
ものすごい苦労して死んでいっちゃった。
どういう死に方したのかも想像もしたくないけど、そういう厳しい暮らしを生きた人たちだったから。あなた達のおかげで、今こうなってますよっていうのをね、できたら帯の世界に残せたらいいなって。そう考えてるんです。

［質問者］ありがとうございました。

［天羽］とんでもないです。

［質問者］やっぱり歴史について考えると、お話を聞いててちょっと苦しい部分ばっかりが溜まってきて。帯を作ることでそういうもの、南部の女性たちの思いを昇華させるみたいな気持ちで物作りをしているんだなって思ったんですが。天羽さん自身が刺したり、物を作っていって、楽しいな、幸せだなって思う瞬間っていうか、そういう時の話を一言聞けたら、ほっとして帰れるかなと。

［天羽］どれくらい刺しが好きかってことですか？

［質問者］そうですね。

［天羽］何て説明したらいいんでしょう。ただ好きでやってるだけなんですけどね。とにかく針を置きたくないんです。本の中では話してないけど、私は、お正月も大晦日もないんです。すごいなと思うかもしれないけど、全然すごくなくて。私の刺しは、朝になったから起きる、時間になったからご飯食べる、トイレ行きたくなったからトイレ行く。そんな感じです。大晦日に一応、何種類かおせちを作るんですけど。元日は 5 時頃に起きて顔を洗って口をすすいだら、墨を磨るんです。写経をやってるんです。写経して、それから昨日作ったおせちを何種類か食べて、お雑煮食べて。少し経ったら、8 時半か 9 時ぐらいからかな。刺すんです。それは別に注文されたものでもないし、急ぎのことは何もないんです。私には急ぎの仕事とか一切ない。ただただ、毎日毎日やってることが、私にとっては、何でしょうね、薬でもないし…。ただ好きだからやってるだけなんだけど。何とも言えないですね。
元日の 9 時ぐらいに娘から電話がかかってくるんですよ。すると、「あけましておめでとう」じゃなくて、「お母さん写経終わった？」って。「終わったよ。もう刺してるよ」って。いつもそんな感じですかね。それで答えになりますか？

［質問者］はい、ありがとうございます。好きなことを好きっておっしゃっている笑顔が見られて良かったです。

［伊多波］時間になりましたのでそろそろ終了とさせていただきます。天羽さんはこのあと展示会場にもおりますので、この機会にぜひお話していただければと思います。本日はご来場いただきまして誠にありがとうございました。

2024 年 9 月 21 日（土）
八戸ポータルミュージアム　2 階ギャラリー 2

本展覧会では、八戸市で南部菱刺しに出会って半世紀、独学で唯一無二の表現を手に入れた天羽やよいさんの作品を紹介いたしました。

南部菱刺しは、生活の知恵として生まれたもので、特別な女性たちが行っていたわけではありません。わたしたちの祖母も曾祖母もまた、家族を寒さから守るために、友達と三幅前掛けの出来栄えを競って刺していたのかもしれません。いま、ここにいるわたしたちとつながりのある手しごととして南部菱刺しをみると、その美しさは一層尊く、より親しみを感じられます。

そして、青森県南部地方で生まれた手しごとを極め、現代的な美しさを持つ南部菱刺しへと昇華させた天羽さんの作品は、次世代のつくり手に憧れと手しごとの可能性を示唆してくれたのではないでしょうか。

八戸ポータルミュージアム

本展覧会開催にあたり、ご協力いただいたみなさまに、八戸ポータルミュージアムと
天羽やよいから、心よりの謝意を表します。（敬称略・50 音順）

小田嶋暁子（ROUTE）／川守田礼子／木下牧子／庄司忍／下舘さた／中澤佳子／
山本節子／福井裕美子／藤田眞佐子／星野美代子／塚田恭子／山口達彦（TRNK）／
山本貴士（kodika studio）　（敬称略・50 音順）

天羽やよい展

名もなき南部女に捧げる刺しの花

会　期　2024 年 9 月 14 日（土）～ 9 月 29 日（日）
会　場　八戸ポータルミュージアム　シアター 2
主　催　八戸ポータルミュージアム

展示会場制作　TRNK
ビジュアルデザイン　ROUTE
作品撮影　kodika studio
企画制作　八戸ポータルミュージアム　学芸員 伊多波麻衣子